

音響ドラマ制作サークル おにぎりワゴン

「LAST desire ーラスト・ディザイアー」第十三話

登場キャラクター一覧

- ・ 神崎 正斗
- ・ 久留巳 勇希
- ・ 稲葉 健
- ・ 千堂 十夜
- ・ 有栖川 鳴
- ・ 森田 幹久
- ・ 高峰 歩
- ・ 響 彩子
- ・ 中ッ原 翔太
- ・ 中ッ原 巴
- ・ 諏訪 京也
- ・ ナビィ||α
- ・ ナビィ||β

1

13・1 正斗のモノローグ

正斗M 「何かを望めば、何かが変化する。」

それは、決して自分が望んだ変化だとは限らない。

けれど、何も望まなかったら前に進めない。ずっと停滞したままだ。

変化を恐れず、一歩足を踏み出すこと。望んだ変化じゃなくても

だからこそ見える景色もあること。そのことを僕は教えてもらった。

この人たちの変化を守りたい。僕も、前に進みたい。

だから、そのための一歩踏み出したんだ」(モノローグ)

13・2 ラストディザイア内

正斗の息遣いが響く

正斗 「はあっ……はあっ……くっ……」(息が荒い。悔しく、歯を食いしばる)

次にαの音が響く

α 「あつれ、もう終わり？」

ナビィたちにやられ、全員が立ちあがれない。

歩 「はあっ……こんなの、反則……」

鳴 「想像以上に、きついですわね……」

翔太 「……くそ……なんて強さなんだ……」

正斗 「はあっ……はあっ……!」

勇希 「正斗……！」

α 「ほら、だから無意味だって言ったでしょ？」

β 「思ったよりも、あっさりだった」

α 「でもそこそこ楽しかったよ！」

β 「ありがとう、マサト」

正斗 「っ……」（悔しさとナビイたちの嫌味で、言葉が出ない）

「」でOP入り

13・3 ラスト・デザイナー内／健・α側

前のシーンよりも少し遡る。

αと戦う健。ガードは残り、勇希・十夜・巴。

α 「はあ！ やあ！ とーう！」（攻撃している。声は軽め）

健 「ぐっ！ くっそ！ なんつー攻撃力だ……！ 抑えきれねえ……！」

十夜 「稲葉！」

勇希 「大丈夫か！」

健 「そんな不安そうな声出さなって！ 俺の絶対防御で守ってやんよ！」

健M 「つつても、こっちのガードはあと十夜と勇希と翔太の姉ちゃんだけだ。

防御に特化した俺が食いとめねえと！」（心の声）

α 「あはは！ 君のその盾、こんなに頑丈だったんだね！

見てるだけじゃわからなかった、よっ！」（「よっ」で思い切りパンチする）

健 「ぐっ……！ お前、そんな余裕かましていいのかよ。

13・4 ラスト・ディザニア内／正斗・β側

α

β、ガラ空きだぜ！」（耐える）
 「君もさつきから見えて知ってるでしょ？」
 βだけでも十分他の三人の相手ができるってさ！」

ガードであるβに向かっていく、正斗・鳴・歩・翔太
 だが、その攻撃全てを軽々とよけるβ

鳴 「そーっつれ！」（思い切りハンマーを振る）

β 「わあ、危ない危ない」（よける）

歩 「よそ見していいのかなあつと！」（かかとおとし）

β 「よっ」（よける）

正斗 「はあああ！」（振りかぶり、攻撃）

β 「つと」（よける）

翔太 「っ！ っ！」（銃を何発も撃つ）

β 「それっ」（よける）

鳴 「全く、なぜあんなに身軽なのかしら、腹立たしい」

正斗 「バラバラに攻撃していたらダメだ。連携を取らないと」

翔太 「ですが、どうやって」

正斗 「……。歩ちゃん」

歩 「ん？ なに？」

正斗 「歩ちゃんのスコープの機能、詳しく教えてくれる？」

鳴 その間、鳴ちゃんと翔太君は、βへの攻撃を続けて時間を稼いでもらえるかな
 「作戦を練るのですね。いい案を期待していますわよ。」

わたくしたち全員の命がかかっているのですから」

正斗 「……うん、わかってる」

翔太 「あ、……え、と……」(前回の戦いを思い出し、言葉につまる)

鳴 「……。あのこと、忘れていませんわよ」

翔太 「うん。……あの時は、ご(めん)」(謝ろうとして、鳴に止められる)

鳴 「謝らないでください。あなたがわたくしにしたことは忘れません。けれど、許さないわけではありませんわ。」

……有栖川鳴を舐めないでください」

翔太 「……ありがとう」

鳴 「ふん。さあ、時間稼ぎしますわよ」

翔太 「うん」(決意のこもった返事)

翔太と鳴、βへと向かっていく

歩 「よし、それじゃ教えるね」

正斗 「うん」

13・5 ラスト・ディザニア内／諏訪・彩子・幹久視点

三回の攻撃を受けてしまった幹久と彩子。戦いを見守っている。

諏訪、複雑な表情で戦いを見ている。

彩子 「全く、こんなに早く三回攻撃を受けちゃうなんて」

幹久 「はは。年長者だから逃げ足が遅かったのかな」

彩子 「私はまだ二十六よ！」

幹久 「あ、ご(めん)」

諏訪 「……正斗くんは何を考えているんだ。奴らに勝てるわけがない」

彩子 「一時(いつとき)とはいえナビイたちから力を奪った貴方が、それを言うの？」

諏訪 「……」

彩子 「さっきまでの威勢の良さはどうしたのよ。もしかして失敗に弱いタイプ？」

諏訪 「……失敗か。確かに、人生でこんな失敗をしたのは初めてかもしれない」

彩子 「うわ、なにそれ嫌味？ 私なんて失敗だらけよ」

幹久 「はは、僕も仕事でいつも失敗ばかりしてるなあ」

彩子 「十年も頑張ってきたことを、たった一度の失敗で諦めちゃうの？」

諏訪 「……僕が何をしようとしたのか、わかっていてそう言うのかい？」

彩子 「あなたがしようとしたことが良い事か悪いことか、
正直なところ現実味がなさすぎてわからないだけよ」

諏訪 「はは。このゲームの参加者全員楽観的すぎるところがあるね」

幹久 「皆、このゲームを通して、成長したからじゃないかな」

諏訪 「……成長、か」(正斗のことを思う)

幹久 「このゲームに参加して、人生まだまだ捨てたものじゃないと思ったよ。
……ほしいもののために努力することは、
それにちゃんと向き合うことだと、小さな女の子に教えてもらった。
諏訪さんが求めているものも、何かと向き合って生まれたんだよね？」

諏訪 「……」

彩子 「……。ちよつと、シカト？」

幹久 「まあまあ、彩子さん」

諏訪 M 「何かと向き合って生まれたもの……。
僕は何故、技術力だけではなく、
全ての魂をこの電脳空間に移動させたいと思ったのか。
確かになにかきっかけがあったはずだ。……なにか」(心の声)

正斗、歩からスコープの機能について話を聞いている。

正斗 「相手の数秒前の行動を予知できるだけじゃなかったのか」

歩 「うん。相手の能力値とか弱点とか、ゲームっぽいこともわかるよ。

ただイマイチ使い方がわかんなくてその機能は使った事ないんだあ」

正斗M 「 α や β の弱点が分かればこの状況をどうにかできるはず……」(心の声)

正斗 「機能はそれだけ？」

歩 「ううん！ あとね、他のプレイヤーとの通信機能があるみたい」

正斗 「そんなのまであるの？」

歩 「うん！ でもこのゲームじゃああんまり意味ないな〜って」

正斗 「確かに……。試しに鳴ちゃんと通信できる？」

歩 「うん。このくらい離れててもできるはず。ちょっと待ってね〜。

えっと……こうして、こう、だっけ？

(繋がる) あ、もっしも〜し！」

鳴との通信が繋がる

鳴 「うわあ！ な、なんですの!？」(通信越し／歩の声に驚く)

歩 「繋がったよ〜」(正斗に対して伝える)

正斗 「……今回の戦いにはもってこいの機能だね。

ありがとう、もういいよ」

歩 「うん！ あ、鳴ちゃんごめんね！ またあとで〜」

13・7 ラスト・デザイナー内／健・α視点

鳴 「え、ちょ、ちょっと!? なんですかこれは!」

鳴の台詞の途中でフツツと通信を切る

正斗 「よし、僕たちも二人のところに戻ろう」

歩 「うん!」

行こうとすると、後ろから誰かが近づいてくる足音

正斗 「っ、誰! ……あ」(振り返り、誰なのかを認識する)

αからの攻撃をなんとか防いでいる健

α 「ほーらっ! そろそろ限界でしょー?」(ほーらっ、で思い切り殴っている)

健 「ふーんだ! こんな屁でもねえよ!」

勇希 「くっそお……私も戦いてえ」

十夜 「何も手助けできないことが、もどかしい」

健 「お前らは守られるのが仕事だ、気にすんな!」

α 「ねえ、そっちも攻めてきなよ〜」

健 「そうしたいのは山々だが、こっちは全員の命かかってるんでね」

健M 「αはきつと、全力を出してない。」

この状況をまだ楽しんでる。けど、飽きた時がやべえ。

あいつの全力を防ぎきれない気がしない。……何か考えろ。何か」(心の声)

「はあ。なんかつまんない」

「っ」

α 「つまんなーい！ せっかくリードになったのにバトルって感じがしなーい！」

健 「……」(どうすればいいかわからず考える)

十夜 「稲葉」

健 「んだよ」

十夜 「俺たちのことは気にせず、全力でいけ」

勇希 「ぼっこぼこにしてこい！」

健 「お前ら……。ははっ。そうだな〜！ 守りばっかは性に合わねえわ！
こっから俺も、攻めさせてもらうぜ」

α 「やった〜！ じゃあ、いっくよ〜！ とーう！」(思い切り拳をぶつける)

健 「ぐっ！ はあっ！ どりゃああー！」

α 「(防ぎ、それを跳ねのけ、盾をαにぶつける)

「うっ！ よいしょっとお！ はは！ 攻撃力もなかなかだね！」

α 「(受け止めて、はねのける。楽しそうに話す)

健 「自画自賛かよ。武器作ったのもお前らだろ！」(攻撃の手を休めずに)

α 「武器を考えたのは京也くんさ！ そのへんは僕らの専門外だから、ね！」

健 「(健の攻撃をよけつつ。最後は攻撃する)

「っ！ なるほど、な！」(攻撃を受け止め、さらに攻撃をする)

α 「やー！ とーう！」(声は軽く。けれど攻撃の威力は相当)

健 「ぐっ！ っ！」(防ぐ)

α 「えーいー！」

健 「ぐっ！ くっそ」(防ぐ。相手の威力に押され攻撃ができない)

α 「とー！ やー！ はー！」(続けて攻撃)

健 「ぐっ！ っ！ っ！」(相当な威力の攻撃で、防ぐことしかできない)

α 「さっきと変わってないよ〜もっと攻めてきななってば！」（攻撃の手を休めず）

健 「ぐっ！ くっ！」（防ぐのに精いっぱいになっている）

α 「ああ、なるほど。さっきのは嘘だったんだね」

健 「あ？」

α 「君は防御に徹していたんじゃない。防ぐことで精いっぱいだったんだ」

健 「っ」（凶星）

α 「なくんだ。やっぱりつまんない。

β も飽きてきてるだろうし、そろそろ終わらせよっかな」

健 「っ！ 終わらせるかよッ！ はっあああ！」（思い切り攻撃する）

α 「えいっ」（軽い声で、はじきかえす）

健 「ぐあああ！」（はじかれて、吹き飛ばされる）

十夜 「稲葉ッ！」

勇希 「稲葉！」

巴 「稲葉さん！」

健 「ぐっ……くそ……！ 弾かただけで……こんな……」

α 「さて、どっちからやろっかな〜」

健 「くっ……！（立ちあがる）」

α 「おお！ ちょっと本気出して弾いたのに立ち上がるなんてすごいすこーい」

健 「そりやどうもッ！ はあああああ！」（思い切り盾をαに向かわせる）

α 「よっと！」（受け止める）

健 「っ！ 盾を！」

α 「攻撃が単調すぎ。はい、返すね〜っとお！」（盾を健に向かって投げる）

健 「っ！ ぐあああ！」（よけることができず、思い切りくらう）

十夜 「稲葉！ おい、大丈夫か！」（かけよる）

健 「くっそ……」（立ち上がるようにする）

十夜 「もうやめろ！ 忘れたのか、このゲームで攻撃を受け過ぎると」

健 「わかってるって……でも、ここで負けたら、俺たち全員死んじゃう……」

十夜 「っ」

健 「こんなおもしれえ奴らと知り合えたのに、ここで失くすのは惜しいだろ」

十夜 「……」

ここで、その場の参加者（ナビイたち以外）に正斗からの通信が入る

正斗 「その通りです、健さん！」（戦いつつ、通信を繋げる／通信越し）

健 「わあ！ な、なんだ!？」

十夜 「この声は」

勇希 「正斗！」（嬉しそうに）

正斗 「諦めないでください！ 絶対に勝てますから！」（通信越し）

健 「え、お、おい、なんでお前の声が」

α 「ん〜？ どうしたの？ 追い込まれて変になっちゃった？」

健M 「こいつには聞こえてねえのか」（心の声）

すると、遠くでβのやられる声が聞こえる

β 「うわああ！」（攻撃を受ける）

α 「っ！ β!？」

ここで場面切り替え

視点は正斗たち側に。

四人の連携でβに攻撃を当てられた。βのゲージが減る。

β 「うう……いたい……」

歩 「やったあ！ 攻撃成功！」

鳴 「ここまでやってやっと一発……！」

翔太 「骨が折れるね」

正斗 「でも、攻撃は当たった。あと二回！」

β 「どうして。僕のスピードは誰よりも早いはずなのに」

正斗 「次いくよ！ 皆準備して！」

翔太 「はい！」

歩 「オッケー！」

鳴 「よろしくてよ！」

β 「っ！」（構える）

正斗 「歩ちゃん！」

歩 「はいはい！ スコープ再起動……っ！」

正斗 「翔太くん！」

翔太 「はい！ ……加速」（βの近くまで移動）

β 「っ、遅いよ。っ」（翔太が近付いたのが分かり、距離を置く）

鳴 「ここ！ そーつれ！」（移動したβを狙ってハンマーをふる）

β 「っ！」（避ける）

正斗 「はあ！」（近くに待機していた正斗が刀を振りかぶる）

β 「っ！ どうして！ っ！」（近くにいることに驚きつつ、よける）

β M 「僕が移動するところを全員が知ってるかのような動き。どうして。予知能力はあの子だけなのに」(心の声)

翔太 「はああ！」(何発も撃つ)

β 「っ！」(避ける)

鳴 「上に逃げるのなんか、お見通しです、わ！」(ハンマーを振る)

β 「っ！ また！」(よける)

正斗 「はああ！」(再び攻撃)

β 「くっ！」(よける)

β M 「一気に遠くまで逃げれば！」(心の声)

翔太 「グラビティ・ショット！」

β 「っ！ うわああ！」(食らう)

β、思い切り食らってしまい、その場に倒れる。

二回目の攻撃を受け、βの足枷ゲージが減る

β 「……体が動かない……！」

翔太 「よし……」(小さく呟く)

歩 「やったあ！ 二回目の攻撃成功だ〜！」

正斗 「ふう……」

β 「どうして……さっきまで僕のスピードについてこれてなかったのに」

正斗 「歩ちゃんのスコープのおかげだよ」

歩 「えへへ〜」

β 「でも、全員僕の動きを先読みしてた……どうやって」

正斗 「スコープにある通信機能を応用した。

歩ちゃんには、予知機能に集中してもらって、

そこで予知した動きを通信機能を使って、

直接僕らに伝えてもらったんだ」

歩 「ボクが予知で見た映像を皆と共有してたってこと！」

翔太 「君の早さについていけないところを、それでカバーした」

β 「そんな機能があったなんて……しかも応用まで。

君たちがそんなに賢いなんて、知らなかった」

諏訪 「僕が教えたのさ」

β 「っ、……京也くん」

※ここで回想が入る。シーン4最後の部分から※

正斗 「よし、僕たちも二人のところに戻ろう」

歩 「うん！」

行こうとすると、後ろから誰かが近づいてくる足音

正斗 「っ、誰！ ……あ（振り返り、誰なのかを認識する）

諏訪 「やあ、正斗君」

正斗 「……諏訪さん」

歩 「わあ、本物だあ」

諏訪 「調子はどうかな？」

正斗 「……まあ、なんとか」

諏訪 「はは、そんなに警戒しないで。

君たちの邪魔をしにきたんじゃない。むしろ逆だよ」
歩 「お手伝いをしにきたってこと？」

諏訪 「ああ。君たちの武器を作ったのは僕だからね。
何か役に立てるかと思ってる」

正斗 「また何か企んでるの？」

諏訪 「……。理由がわからなくなってしまったんだ。
ずっと、前を向き続けるのも考えモノだね」

正斗 「？ 何の話？」

諏訪 「なんにせよ、僕らに共通していることはナビイたちを
どうにかしないといけないということさ。

奴らを消す手助けをさせてくれないかな？」

正斗 「……。ひとつ、きかせて」

諏訪 「なんだい？」

正斗 「どうして、僕をこの戦いに参加させたの？」

諏訪 「……。きっと、それを聞いたら、幻滅するだろうね」

正斗 「もうだいたい幻滅してるけどね」

諏訪 「ははっ、素直になったね。……（息を吐く）……」

このゲームは欲望のゲームだ。想いの強い人間がプレイヤーとして選ばれる。
そうじゃないと、真剣に戦ってもらえないからね。

どの世界線でも、その点だけは変わらなかったらしい。

だから、僕は君を選んだ」

正斗 「……。僕には、欲望がないから」

諏訪 「ああ。君はご両親を事故で亡くしてから、何かを欲することをやめた。
ご両親は君が駄々をこねた誕生日プレゼントを買うために出かけて

事故に遭ったからね。……幼いながら、自分のせいで死んだと思っただろう」

正斗 「……」

諏訪 「欲望がない人間がこのゲームに参加し、勝利する。そうしたら、願いはどうなると思う？」

正斗 「……わからない」

諏訪 「そう。わからない。」

正斗 わからないものは、知りたい。僕は昔からそういう人間なんだよ」

正斗 「……僕が優勝したら、賞品がどうなるか知りたかったってこと？」

諏訪 「君が優勝賞品として見せられた映像は未熟なものだったはずだ。それは、君の欲望が曖昧だったから。そしてきっと、ナビィたちも少しは動揺する。その隙について、能力を奪おうという計画だったんだ」

正斗 「……」

諏訪 「幻滅しただろ？」

正斗 「……。ふ、ふふ、ははは」

諏訪 「ま、正斗くん？」

正斗 「はははは！」

諏訪 「どこか壊れたのかな？」

正斗 「はあ……。どこまでも諏訪京なんだね、諏訪さんは」

諏訪 「バカにしてる？」

正斗 「まあね。……最低な人だけど、それでも、僕は諏訪さんを嫌いになれないよ」

諏訪 「君もずいぶん変わってるね」

正斗 「だって、諏訪さんは僕にとって、家族だから」

諏訪 「っ」

正斗 「……両親が死んでから、なにかと僕と姉さんのことを気にかけてくれて結婚してからも、僕の様子を見に来てくれて。なんのお返しもできないガキなのに、ずっと見守ってくれた」

諏訪 「……」

α 「ああ。あの人なら、動けないようにさせてきたよ」

正斗 「っ、歩ちゃん通信！」

歩 「う、うん！」

歩、正斗と健の通信を繋ぐ。

正斗 「もしもし、健さん！」

健 「ぐ……正斗か……」（通信越し）

正斗 「大丈夫ですか!？」

健 「わりい……十夜と翔太の姉ちゃん、守り切れなかった……」

正斗 「……。ゆっくり休んでください……」

健 「はは、わりい。動けねえし、そうさせてもらうわ……」

通信を切る

正斗 「……」

α 「どんなに殴っても蹴っても、あのデカイの退（ど）かなくて
一人だけ逃しちやったけどね」

遠くから勇希が走ってくる

勇希 「正斗！」

正斗 「っ、勇希さん！」

α 「君たちがここまでやるなんて思ってた。でも、もうそれも終わりだよ」

α、指を鳴らす

するとβのゲージと状態が回復

正斗 「っ！ βのゲージが回復した！」

β 「よっとう」（立ち上がる）

翔太 「……それに、状態異常まで……」

歩 「そんなの反則だよ！」

鳴 「全くですわ」

α 「これは僕たちのゲーム。僕たちが負けるなんてありえない」

β 「出来レース」

α 「さくつと勝って、君たち全員殺してあげる！」（笑顔で）

鳴 「そうはいきませんわ！」

歩 「うん！ 死にたくないもん！」

翔太 「さっきの連携を使って、戦いましょう」

正斗 「……うん！」

勇希 「やってやろうぜ！」

α 「無意味だっということがわからないなんて、人間は本当に愚かだね」

β 「だからこそ、面白い」

13・9 ラスト・デザイナー内

そして、冒頭のシーンに戻る。

正斗の息遣いが響く

正斗 「はあっ……はあっ……くっ……」（息が荒い。悔しく、歯を食いしばる）

次にαの声が響く

α 「あつれ〜、もう終わり〜？」

ナビイたちにやられ、全員が立ちあがれない。

歩 「はあっ……こんなの、反則、……」

鳴 「想像以上に、きついですわね……」

翔太 「……くそ……なんて強さなんだ……」

正斗 「はあっ……はあっ……！」

勇希 「正斗……！」

α 「ほら、だから無意味だって言ったでしょ？」

β 「思ったよりも、あつさりだった」

α 「でもそこそこ楽しかったよ！」

β 「ありがとう、マサト」

正斗 「っ……」(悔しさとナビイたちの嫌味で、言葉が出ない)

α 「さあてと！ そろそろゲームセットといこうかー！」

正斗 「っ」

正斗M 「ダメだ。このままだと、皆僕のせいで……！」(心の声)

放送のマイクが入ったときのキーンという音が入る

全員 「〜〜〜！」(キーンという音に耳を抑える)

※この台詞は以下のキャラ全員収録してください

↓正斗・勇希・鳴・歩・翔太・諏訪・α・β

空間全体に、良美の声が響く

良美 「あくあくマイクテストマイクテスト」(流れてくる声)

α 「な、なに？」

諏訪 「この声は」

正斗 「姉さん!？」

勇希 「良美さんか!」

良美 「やつほ〜! まーくん、勇希ちゃん、元気〜？」

正斗 「姉さん、どうして!」

良美 「システムに侵入して放送チックに私の声をお届けしてるの!」

正斗 「そうじゃなくて、諏訪さんに捕まってたんじゃないの!？」

良美 「え? ああ、あれね。あんなのちよいのちよいで抜けてきたわ」

諏訪 「……最新セキュリティの扉を解除したんだね。さすがだよ」

良美 「ふふん! 数年前まで京也さんの元で働いてたからね。

こんな簡単な解除できたわ」

翔太 「神崎さんのお姉さん、すごいですね」

正斗 「うん。僕もびっくり」

α 「京也くんの奥さんか。僕たちの邪魔をしようとしたって無意味だよ」

β 「僕らを止めることは、できない」

良美 「それはどうかしら〜? ぽちっとな!」

ナビイたちの動きを止める入力をする

α 「っ! か、体が!」

β 「動かないっ」

良美 「ふふ、ドーンなもんだい!」

諏訪 「その力、もしかして君は」

良美 「京也さんがナビイたちから力を奪った時

あなたのアカウントにアクセスして、能力のコピーをしたの。
まあ不完全なものだけどね」

鳴 「有能すぎますわ……」

歩 「よくわかんないけどすごい」

α 「こんなの反則だ！」

β 「そ、そうだそうだ」

良美 「パラメータをガン上げしてる上に、

ゲージ回復までやっちゃったアンタたちに言われたくないんですけど？」

α 「うっ」(凶星)

良美 「さーって……。京也さん！」

諏訪 「は、はい」

良美 「**あなたが何をしようとしたのか、全部聞いてたわ**」

諏訪 「……」

良美 「ホント、バカよね！」

諏訪 「……返す言葉もない」

良美 「どんだけうちのお母さんが好きだったのって感じよ！」

諏訪 「………え？」(唐突すぎて、頭に？が浮かぶ)

良美 「もしかして、気づいてなかったの!？」

諏訪 「えっと……なんのことかさっぱり」

良美 「はあ。あのね、京也さんはうちのお母さんが好きだったのよ。

正確に言えば、えっと、魂の交換ってのをされたあとのお母さんね」

諏訪 「そんなのありえない。数か月しかいなかった人だよ」

良美 「あなた言ったでしょ？ 私とお母さんが似てるって。

でも、私たちのお母さんはどっちかっていうと正斗みたいに

少し大人しい感じだったでしょ」

「……」

良美 「あなたは無意識に、私と、あの数ヶ月間一緒に過ごしたお母さんを重ねてたつてこと。もう、こんなこと言わせないですよ」

「……そうか……そうだったのか」

良美 「あなたがどうして、電腦空間への魂の移動にこだわったのか、察しがつくわ」

諏訪 「……僕もようやくわかったよ。……君たち姉弟には、かなわないな」

正斗 「諏訪さん……」

良美 「さてさて〜！ これからこの子たち、どうしてやろうかしら？」（ニヤニヤ）

α 「っ！ このお！ ……あれ、力も使えない！」

良美 「一定時間内だけこのゲームは私が支配してるもの。無駄よ、無駄」

正斗 「なんでもありませんだね」

良美 「まあね。まーくん、あなたが彼らに戦いを申し込んだ時、すっごく嬉しかった」

正斗 「……そんな、無駄なだけだよ」

良美 「その無駄をしようとしたことが、嬉しかったの。」

だから、お姉ちゃんは全力でその提案に賛成するわ！

つてことで、さらにぼちっとなー！」

良美、ナビィたちのパラメータ減少させ、βの足枷ゲージも残り一に変更

α 「っ。何をしたの」

β 「僕の足枷ゲージが残り一になっちゃった」

良美 「ナビィたちの能力をここにいる全員の平均値まで下げたわ。

ついでに、さっき回復させたゲージも元に戻したのよ。

これで平等に戦えるってわけ」

α 「僕たちを消さないの？」

良美 「そんなことしないわよ。私は部外者だもの」

β 「さすが、京也くんの奥さんやってるだけあるってことだね」

良美 「お褒めにあずかり光栄です。なんちゃって」(諏訪の真似)

鳴 「でもこれで、わたくしたちの勝ちが確定ですわ」

歩 「そうだね！ 動ける人全員で攻めれば！」

良美 「あゝ、君たちは不参加だから」

鳴 「え！？」

歩 「な、なんで！？」

翔太 「……なるほど、『平等』ですか」

良美 「そういうこと。……まーくん」

正斗 「……うん」

良美 「あなたのチームだけで、戦うのよ。提案した責任があるんだからね」

正斗 「わかった」

良美 「勇希ちゃんもね」

勇希 「うっす！」

良美 「よーし！ それじゃあ他の人たちは観戦ルームに移動させるわよ」

鳴 「正斗さん、ファイトですわ」

歩 「頑張ってね〜！」

翔太 「あなたなら大丈夫です」

正斗 「ありがとう」

諏訪 「……正斗君、悔いのないようにね」

正斗 「諏訪さん……。頑張るね」

諏訪 「(微笑む)」

正斗、勇希以外全員、観戦ルームに移動する。

その場が一気に静まりかえる。

α 「こんなに思い通りにならないのは生まれて初めてだよね、β」

β 「うん」

正斗 「正々堂々、戦おう」

α 「ゲームシステムをいじれない以上、そうするしかないって感じだよ」

良美 「お互いの足枷ゲージは残り一。精いっぱい戦いなさい。

自分たちの欲望の為にね。

それじゃ、カウントいくわよ。

スリー、ツー、ワン……ゲームスタート！」

良美の音が響く。正斗とα、その場で構える。

正斗 「(息を吐く)……」(緊張している)

正斗M 「ここで僕が負けたら、全員……。絶対に勝たないと……」(心の声)

勇希 「おらっ！」(正斗を殴る)

正斗 「うっ！」(殴られた衝撃)

勇希 「なあに硬くなってるんだよ。どうせお前の事だから

『僕がまけたら皆死んじゃう』とか考えたたんだろ」

正斗 「う、うん」

勇希 「まあ確かにその通りだけどよ。

なによりも、これはゲームだ。楽しもうぜ」

勇希の体にノイズが走る

正斗 「っ、勇希さん」(それに気づく)

勇希 「……。ほら、やんぞ」(わかってて、笑顔で)

正斗 「……そうだね。楽しんでいこう」(それを受け止める)

α 「それじゃ、いづくよ！ とーう！」(素手で攻撃)

正斗 「っ！」(防ぐ)

α 「はっ！ たあ！」(攻撃の手を休めない)

正斗 「っ！ っ！」

正斗M 「力は平均値のはずなのに、ここまでの威力を出す事ができるのか」(心の声)

正斗 「はああ！」(攻撃)

α 「よっと！」(避ける)

正斗M 「αの攻撃は素手のみの近距離タイプ。遠距離に弱い分、攻撃力が高いのか。
なら……」(心の声)

正斗 「勇希さん、ついてきて！」(走り出す)

勇希 「おう！」

α 「僕と距離をとろうってこと？ そうはいかないよ！」(ついていく)

正斗と勇希、しばらく走る。それについでいく

α 「ねえ！ 追いかけてこのつもり？」(追いかけている)

正斗M 「ナビイたちは宙に浮いてる。

けど、スピードは若干僕たちのほうが早い」(心の声)

正斗、足を止める

正斗 「はああ！」（攻撃をしかける）

α 「っ！ っと！ マサトの武器は波動での攻撃もできるんだったね！

危ない危ない」

正斗 「……」

正斗M 「反応速度は、皆とあんまりかわらないくらいかな」（心の声）

勇希 「なあ、さっきからなにやってたんだ？ そんなちよこちよこ攻撃しねえで

ガンガンいけって！」

正斗 「……はあ」（勇希のアホさに溜息）

勇希 「あ、その溜息、私のことバカにしてるだろ！」

正斗 「ごめんごめん。ちよつとだけαのこと分析してただけだから。

今から、ガンガンやってくよ」

勇希 「よっしや！ 頑張ろうぜ！」

正斗 「……よし。……はあああ！」（攻撃をしかける）

α 「次は直接攻撃ってこと？ そんなの受け止められるよ！」

正斗 「っつと！」（αの足の下を滑って通る）

正斗、スライディングでαの足の下を通る

α 「っ！ え、え！？」

正斗 「はあっ！」

α 「ぐあ！」（攻撃をくらう）

α、よめく

α M 「僕が宙に浮いていることを利用して、その下をくぐって後ろに回ったのか」
 (心の声)

α 「あなどれないなあ、マサトは！」

正斗 「どういたしまし、て！」(攻撃する)

α 「っ！」(受け止める)

正斗 「はあ！ はああ！」(攻撃の手を休めない)

α 「ぐっ！ くっ！ 威力が増してる！」(防ぎつつ)

正斗 「はあああ！」(思い切り攻撃)

α 「ぐっ！ ……こんなの、くらったうちに入らないよ！ はあ！」
 (くらうが、そのまま立て直して攻撃する)

正斗 「っ！」(防ぐ)

α 「近距離戦だと僕のほうが強い！」(攻撃しつつ)

正斗 「っ！ っ！」(防ぐ)

α 「はあああ！」(思い切り殴りかかる)

正斗 「ぐっ！」(刀で受け止める)

α 「力比べだよ……！」(ぐぐぐ、と受け止められた拳で押していく)

正斗 「くっ……！」(押される)

正斗 M 「押し負ける……！ こうなったら」(心の声)

正斗 「っ！」(刀をずらし、そのまま手を離す)

α 「っわあ！ っつと！ ちよつと、急に刀から手を離さないでよ！」
 (急に正斗が刀から手を離れたため、こけそうになる)

正斗 「はああ！」(素手で攻撃)

α 「っ！ ぐあっ！」(思い切り食らう)

正斗 「っ、はああ！」(刀を拾い、再び攻撃)

α 「くっ！ もう、君の戦い方はめっちゃくちゃだよ！」(防ぎつつ)

正斗 「こういうゲーム、やったことないから！ セオリーなんて知らないだけだよ！」

α 「なるほど、ね！」(攻撃)

正斗 「っ！」(よける)

α 「なら、こうするまでだ、よ！」(思い切り殴る)

正斗 「ぐっ！」(なんとか防ぐ)

α 「はあ！ はああ！ やあ！」(三回攻撃。全て全力)

正斗 「ぐっ、っ、っ！」(なんとか全て防ぐ)

α 「この威力の攻撃を連続で出されたら！

君も下手に動けないで、しょ！」(攻撃しつつ)

正斗 「く、っそ！」

α 「はああああ！」(何度もスピードを上げて攻撃する)

正斗 「ぐっ！ ぐああ！」(吹き飛ばす)

α 「ふうー！」

正斗 「ぐっ……っ……っ……」(倒れる)

少し離れたところで見ている。

β 「よし、ナイスだよ、α」

勇希 「よそ見してていいのかな？」

β 「え？」

勇希 「どりやああ！」(βを蹴る)

β 「うわあ！」(思い切りくらくらう)

α 「っ！ β！」

β 「いったた。ガードがガードに攻撃しても

ゲージは減らないの知ってるでしょ……！」

勇希 「ああ、知ってるぜ？ でも、お前が動けなくなるまで蹴ることはできるんだよなあ？」（ニヤアと笑う）

β 「ひっ」（勇希にびびる）

勇希、βを蹴りまくる

β 「いたーい！ やめ、やめてー！」

勇希 「おらおらおら〜どうしたどうした〜！」

α 「β！」（助けに行こうとする）

正斗 「はあ！」（その隙を攻撃）

α 「っ！」（なんとかかよける）

正斗 「君の相手はこっちだ」

α 「はあ。そうだったね」

二人、構えなおす。

正斗 「……」（集中する）

α 「……」（集中する）

二人同時に攻撃をしかける。

正斗 「はああああ！」（攻撃をしかける）

α 「やああああ！」（攻撃をしかける）

戦い続け、どちも消耗している正斗とα

正斗 「はあっ……はあっ……」

α 「はあ……はあ……」

正斗 「はあああ！」（力を振り絞って攻撃）

α 「ぐあっ……。っ、やああ！」（よければ食らう。攻撃する）

正斗 「ぐっ……はあ！」（食らう。再び攻撃）

α 「くはっ……。はあっはあっ……いい加減、倒れなよ……」

正斗 「そっちこそ……」

α 「負けるわけにはいかないよ……自分の作ったゲームで」

正斗 「僕だって……倒れるわけにはいかないんだ……はあああ！」

α 「ぐっ！ ぐああ！」（倒れる）

正斗 「はあっ……はあっ……」

α 「……（ゆっくり立ち上がる）……。スーハー……。深呼吸）。
いい加減、もう疲れた。これで、終わらせるよ……」

α、拳にパワーと溜める。

正斗 「あれは」

正斗M 「鳴ちゃんの必殺技のときと同じ。αの拳にパワーがたまっていってる」
(心の声)

正斗 「……（深呼吸）」

正斗M 「僕にも、出来るはず」（心の声）

正斗、刀に力を溜めていく

正斗M 「この一撃で決まる。……僕の想いを全て、ぶつけるんだ」（心の声）

勇希 「正斗……」

正斗 「……」

α 「……くっくっええ」

αから仕掛ける

α 「はあああああ！」

続けて正斗

正斗 「はああああああ！」

**お互いの力がぶつかり合う。
凄まじい音と、光が溢れる。**

勇希 「くっ！」（衝撃が伝わってきて思わず目を瞑る）

その衝撃もゆっくりと収まってい

勇希 「……(ゆっくり目を開ける)……どっちが勝ったんだ……」

ゆっくりと立ち上がる音。

勇希 「っ！」

正斗 「はあ……はあ……(息を荒げながら立っている)

勇希 「正斗！」(喜びで名前を呼ぶ)

α 「く……そ……。どうし、て……力は互角だった……なのに」
(倒れながら、悔しそうに)

正斗 「はあっ……はあっ……僕のほうが……治癒力が少し上だった。
多分、その差だよ……」

α 「治癒……そんなもので……」

正斗 「はあ……はあ……」

正斗、ゆっくりと歩きながらβのところに向かう

β 「……く、まだ動けない……！」

正斗 「はあ……。これで、僕らの勝ちだ。っ」(刀を振る)

カのない攻撃がβに当たる。

βのゲージはゼロに。正斗たちの勝利

バトル終了のブザーが鳴り響く

α 「はあ……カンザギ マサト、クルミ ユウキチームの勝利、ですつす」

(声を振り絞って言う)

正斗 「はあ……はあ……」

勇希 「勝った……！ 勝ったぞ！ 正斗！ やったあ！」

観戦ルームから他のメンバーが移動してくる

健 「正斗お！ お前やりやがったな！ すごえぜ！」

十夜 「お疲れ」

鳴 「ま、わたくしは勝つと信じていましたわ」

幹久 「一番そわそわしてたじゃないか」

鳴 「う、うるさいですわよ！」

歩 「すっごいよく！ かっこよかった！」

彩子 「やるじゃない」

巴 「お疲れ様、です」

翔太 「……本当に、よく、勝ってくれました……」

正斗 「皆……」

諏訪 「正斗くん、よく頑張ったね」

正斗 「……うん」(嬉しそうに、照れながら返事をする)

勇希 「ほんと！ すごかったぜ！ 正斗！」

正斗 「勇希さんも、本当にお疲れ様……」

良美の声が聞こえる

良美 「勝負は、正斗たちの勝ちね。

私のシステム制御も限界みたい。αたちの能力も解放されるわ」

α 「……」(黙る)

β 「……」(黙る)

良美 「まーくん。さすが、私の弟だわ！」

正斗 「姉さんのおかげだよ」

良美 「ふふっ。そろそろ通信も切れそう。

あとで会おうね、まーくん」

正斗 「うん」

良美の通信が切れる。

正斗 「……はあ……。さあ、α・β。約束通り、魂の交換という方法じゃない形で僕の願いを叶えてくれ」

α 「わかった。約束だからね。でも、叶えられるのはひとつだけだよ」

健 「はあ！？ なんでだよ！」

β 「このゲームのルールは絶対なんだ。

勝者である、マサトとユウキそれぞれひとつだけ、願いを叶えてあげる」

健 「まったく、最後の最後まで性格悪いぜ」

諏訪 「恐らく、そのルールは彼らにはどうすることもできないようになっ
ているんだろうね。絶対に揺らがないように」

α 「あとひとつ。……魂の交換が行なわれた人を、元の世界に戻すことは
できないようになってる」

翔太 「っ」

巴 「っ」

鳴 「どうしてですか？ そのくらい、たやすいのではなくて？」

α 「これも僕たちが定めたルールさ。」

……人間が苦しんであぐところを見るためにね」

歩 「なら、それをなしにするっていうルール作っちゃえばいいじゃん！」

β 「ゲーム開催中のルール変更はできない」

彩子 「ほんと……なんてゲームなのかしら」

正斗 「……」(考える)

翔太 「神崎さん」

正斗 「翔太君……」

翔太 「……。僕のことには気にしないでください。

もう、戻れないことは……ずいぶん前からわかっていたことですから。

ただ今までは覚悟ができなかった。だから、繰り返しゲームに参加したんです。

……でも、もう……僕は大丈夫です」

正斗 「……」

巴 「……きつと、翔太は違う世界線でも、元気にやっていると、思います。

そういう子、だから」

正斗 「二人とも……」

健 「はあ……。お前たちの願いを、叶えてもらえ」

十夜 「勝ったのは二人だ」

正斗 「……」(息を吐く)

勇希 「正斗」

正斗 「……」

勇希 「私から、言うぞ」

正斗 「……うん」(何を言うか分かっていて、返事をする)

勇希 「よし！ じゃあ私の願いを発表する！ 久留巳勇希を消してくれ！」

健 「っ！ お、おいお前何言ってんだ！」

彩子 「アンタ、どうして！」

歩 「そうだよ！ なんのために正斗さんが戦ったの！？」

十夜 「正斗がここまでやってきたのは、お前を消さないためだったはずだ」

勇希 「今まで、久留巳勇希っていう奴を何回も何回も作り変えてきた。記憶は毎回綺麗に消されちまって、そのたびに新しい久留巳勇希が作られた。でも、根本の部分は残ってたんだ。消しゴムで消したって、跡が残るみたいに。……私が、あの時優勝賞品として見たのは、真っ暗な無だった。今まで何度も何度も作り変えられてきた久留巳勇希が、きっと望んだんだ。もう、消えたいって。自分っていう存在を失くしたいって」

鳴 「そんな……」

勇希 「それに、もう、私の体は限界なんだろう？」

α 「……。うん。正直、修復するにしても、人格を保つことはできないだろうね」

健 「なんとかならねえのかよ！ お前が消えるって、そんな。正斗、お前もなんか言えって！」

正斗 「いいんだ。……今までの勇希さんが、望んできたことだから」

歩 「でも、今の勇希さんは！？ そんなこと望んでるの！？」

勇希 「私は元からいなかった存在だからな！
それに、十分楽しめた。これでもか、つてくらい！」

諏訪 「……本当に、それでいいんだね」

勇希 「おう！ あ、それにプラスして、もう人間を作って遊ばないってのも入れてくれ！」

α 「……。君は僕たちが作った、子どものような存在だ」

β 「プラスの願いも、合わせて叶えてあげる」

勇希 「ありがとう！」

正斗 「……」

勇希 「ほら、次はお前の番だ」

正斗 「……。うん。僕の……。願いは……」

少しの間

正斗 「もう二度と、ラスト・デザインというゲームをやらないと約束してほしい」

α 「……」

β 「……」

正斗 「君たちが一体なんなのか、わからない。

僕たち人間と価値観が違うこともわかってる。

けど、やっぱり君たちがしてきたことを、僕は許せない。

人間の想いと、希望を、繋がりをも、全て踏みにじってきた。

そんな君たちを、許す事なんか、できない」

勇希 「正斗……」

正斗 「約束してほしい。もう、人間をもてあそぶようなことはしないって」

α 「それが、君の欲望、願いなんだね」

正斗 「うん」

α 「わかった。β」

β 「うん。デザインアシスシステム解放！」

α 「勝者、カンザキ マサトと」

β 「クルミ ユウキの願いを」

α 「叶えます！」

β 「叶えます！」

空から、光の粒が降ってくる。

α 「ログアウトをすると同時に願いは叶うよ」

β 「ここまでプレイしてくれて、どうも、ありがとうございました」

正斗 「……勇希、さん」

勇希 「ったく、どうしたんだよそんな泣きそうな顔して」

正斗 「……」(泣くのをぐっと我慢する)

勇希 「ったく、相変わらずなさけねえんだから。

今まで、ありがとな。ホント、楽しかった。

こんな気持ちで終われて、今までの私も、きっと喜ぶぜ」

正斗 「……うん。そうだね」

勇希 「正斗。お前ももっと欲張りになれ。

欲張って、踏ん張って、前向いて歩いていけ。

……それが、私の本当の願いだよ」

正斗 「勇希さん、……僕は、君の事が……好きだった。出会ったあの日から、きっと」

勇希 「へへっ、知ってた！」

正斗 「……。消えてほしくない」

勇希 「うん」

正斗 「もっと一緒にいたい」

勇希 「うん」

正斗 「……君と……人生を歩いていきたい……」

勇希 「……うん」

正斗 「叶わない願いだって、わかってる……それでも僕は……」

勇希 「はあ。そろそろログアウトしちまう。

……正斗、ほっぺたをこっちに向けろ」

正斗 「……え？」

勇希 「いいから向けろ！」

正斗 「う、うん……」

正斗、勇希に言われた通りにする

勇希 「(頬にキスをする)」

正斗 「っ！ え、え、」

勇希 「私も大好きだぜ！ 正斗！ どんなメシよりも、お前が大好きだ！」

正斗 「なに、それ」(笑いながら)

勇希 「へへっ、それじゃあ！ 元気でな！」

勇希の声が溶けるように消えていく。

13・10 二年後・正斗の家

二年後。正斗の卒業式の日の朝。

バタバタと準備している、正斗と諏訪と良美。

良美 「まーくん、ちゃんとハンカチ持った？ 原稿も持った？」

正斗 「もう大丈夫だって」

諏訪 「ねえ、僕のこの髪型どう思う？ ちょっとかつこすぎるかな。卒業生より目立つっちゃうかもねえ」

正斗 「はあ。いつもどおりかつこいいし、それでいいと思うよ」

良美 「わ、わたしの服はどう！？ これおばさんっぽくない！？」

諏訪 「どつても似合ってたて綺麗だよ、良美さん」

良美 「もうっ、京也さんったらっ」

正斗 「はあ……相変わらずラブラブだね。」

……お腹、だいぶ大きくなってきたね、姉さん」

良美 「そうなのよ。このくらいだと太ってる人に見えなくもないから隠すの大変」

正斗 「はは。……さてと、そろそろ時間かな」

正斗M 「あれから二年半の月日が流れた。

あの数か月のことはまだ昨日のことのように思い出せる。

諏訪さんも姉さんも、あれから驚くほどいつもどおりに戻り

健さんたちとも、定期的に会っている。

……本当に、あの出来事が嘘だったかのように、平和で平凡な時間が
ゆっくりと流れていた」(モノローグ)

正斗 「それじゃ、行ってくるね。またあとで」

良美 「ええ！ 頑張つてね！」

諏訪 「嘸まないように。嘸んだら盛大に笑ってあげるよ」

正斗 「ははは……それじゃ、行ってきます！」

正斗、玄関のドアを開ける

13・11 通学路

通学路をゆっくり歩く正斗

正斗 「ちょっと早く出すぎたかな」(腕時計をみつつ)

正斗M 「この二年半も、色んな事があった。

失敗もいっぱいしたし、嬉しい事もいっぱいあった。

……そんなとき、思い出すんだ。あの子のことを」(モノローグ)

正斗、足を止める

正斗 「……（思い出して黙りこむ）。はっいけないいけない。僕の悪い癖だ」

正斗再び歩き出す。すると後ろから猛スピードで自転車がやってくる

勇希 「どいてどいてどいて~~~~!!」

（自転車のブレーキが壊れ、止まることができない）

正斗 「え？ うわぁ！」（気づいて振り返り、よける）

自転車は壁にぶつかる

勇希 「ぐえー！」（思い切り壁にぶつかる）

正斗 「き、君、大丈夫!？」

勇希 「だ、大丈夫大丈夫……体だけは異常に丈夫だから……」

正斗 「っ……君、は……」

勇希 「へ？ え、っと……？」

あ〜ごめん。もしかして、どつかで会った事あった？」

正斗 「……。ううん。僕の気のせいだったみたい」

勇希 「そっか。よいしょっと（倒れた自転車を立て直す）。んじゃ!」

正斗 「……あ、あの!」

勇希 「んあ？」

正斗 「……ぼ、僕の名前は神崎正斗! 君の名前は？」

勇希 「え？ えっと、私の名前は」

勇希 「内緒だ！」（満面の笑みで）

ラスト・デザイナー 完